
お隣りさん

原坂秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お隣りさん

【Nコード】

N4693P

【作者名】

原坂秋

【あらすじ】

中学・高校がエスカレーター式の私立学校。新学期から二ヶ月経って、初めての席替え。

内進生の寺田明文の席は一番端で、隣は話したこともない女生徒、山瀬葉子サンでした。

ある日、二人で帰ってから、二人の関係は変わるのでしょいか……？波瀾万丈の少ない、ゆるくほのぼのした話にしたいと思ってます。視点はヒーローだったりヒロインだったりします。

席替え（前書き）

初めての投稿です……

けっこう緊張しますね！

誤字・脱字・感想等ありましたら、お気軽にぶつぞー！..

席替え

俺……寺田明文^{てらだあきみ}が高一になってから、二ヶ月が過ぎた。といっても俺が通う学校は私立で、中学から高校までエスカレーター式で上がることができる。入学試験などは形ばかりで、たとえ零点をとつても高校生になれたのではないかと俺は推測したのだが、実際がどうであるかはわからない。

変わったことと言えば、ストライプ柄のネクタイの色（中学は赤、高校は青）と、二十人ほどの新生が増えたことだろうか。

現在高一は五クラスあるので、四人だけ外進生がいる。外進生とは教師が新入生を呼ぶときの呼称で、俺らのことは内進生と呼ぶ。軽い差別じゃないか？別にいいけど。

外進生は、新学期の頃はまるで転入生のような扱いを受けていた。女子が二人と……男子が三人だったはずだ。出席番号の関係からか、俺は二ヶ月経った今も外進生と話をしたことがない。まあ、とりあえず説明は置いておいて、今この瞬間の説明をする。

教壇に立った里中^{さとなか}が席替えをしようと宣言をしている。ちなみに里中は担任だ。中年のおっさんだが……細かく説明するようなヤツでもないの、それは省く。

「じゃあ、端の人からクジを引けー。書いてある出席番号の場所に座れ」

新学期は出席番号順に座っている。出席番号の場所とはそういうことだ。

各々クジを引いていき、俺も前のヤツについて引いた。

「どうだった？明文」

^{とがしとおる}友人の富樫徹が紙を握りしめて寄ってくる。悪友と言いたところだが、そう言えないくらいには何でもできる優男だ。欠点を言えと言われれば、一時間くらい考えてから「ジャンケンが弱いところ」と言っただろう。欠点じゃないって？それしか言うことがないんだよ。

仕方ないだろ。

「6！」

「6？うわ、窓側の端じゃん」

だよなー。一番左の一番後ろの席だ。真ん前よりマシか？って、その考え方が成績下落に繋がんだよな。皆はそろそろと席移動を始めている。

徹は嫌な顔せずに一番前に移動する。あいつ、頭いいから。

俺も指定された席に向かい、前と右隣の生徒を確認する。周囲のヤツによって、次の席替えまでの期間の楽しさが決まる。と、俺は思っている。

前に座ったのは、何度か同じクラスになったかな、ってヤツで、一度も話したことがない。クラスに一人はいるだろ？事務的な会話しかしたことないやつ。右隣は、見たこともない女だった。俺も別に顔が広いわけじゃないけど、ほんつとに見覚えがない。チラチラと隣を見てみると、誰かが俺の肩を叩いた。

「うおっわー！」

驚かされてもここまでは……、という程の驚きように、叩いたヤツまで「わあ」と声を上げる。

「な、なんだ、徹かよ。驚かすな！」

「いや、別に驚かすつもりは……ごめん。それより、ここが明文の席かー」

ふーん、って感じでキョロキョロ辺りを見る。HRの最後に席替えをしたので、既に終礼は終わっていた。

俺は徹の耳元に顔を近づけ、右隣の女のことを尋ねてみた。

「……隣？明文、クラスメイトの名前くらい覚えてあげて」

こんな会話を聞かれるわけにはいけないので、自然と声をひそめて顔を近づけて話す。俺らの間には友情しかないからな！と誰にともなく言っておく。

「山瀬葉子やまのせ かなこさんだよ。外進生の」

ひそひそと教わり、ちらーっと山瀬サンを見してみる。……！げ！！

目が合ったー！

名前を呼ばれたのが聞こえたのか、山瀬サンはじとりと俺らを見ていた。見ていた、ってのは柔らかく言いすぎだろうか。睨みつけられていた、と訂正しておこう。

徹も俺が蛇と蛙よろしく睨まれているのに気づき、ハラハラとしていた。

先に視線をそらしたのは、山瀬サンだった。睨んでいた目は徐々に冷たい視線に変化していき（どう違うのかって？それは睨まれたヤツにしか分らない。言ってしまうば、温度だ、温度）、スツと俺から離れる。意味もなく身体が強張っていて、俺がそれに気がついたのは山瀬サンが視線を逸らしてからだった。

「……よし、帰ろうぜ、徹」

明日使う宿題やら教科書整理やらを終え、徹に声をかけた。隣を見るといつの間にか山瀬サンは消えている。いつの間に？存在感の薄いヤツ。

「うん。帰ろ……あ」

「あ？」

「今日、図書委員の仕事があるんだった！」

「図書委員？……ああ」

新学期に、委員会とか級長とか決めるだろ？図書委員でのは、三大面倒委員会として生徒に認識されている。最終的にはジャンケンで決まったのだが、徹は一人負けした。格好はいいのにな。性格もいいのに。ただ、ジャンケンは弱いんだよなー。

サボるヤツも多いと聞く図書委員会。律儀に仕事をする徹は、ちよーうどいい穴埋めだろう。気の毒に。俺はなんも所属してないけどな。

「んじゃあ、別なヤツ誘って帰るわ」

「悪いね。じゃあ俺は先に行くから」

「おう」

徹を送り出してから、俺は隣のクラスを覗き込んだ。そこは、部活のヤツらが着替えたであろう制服が机上に無造作に置いてあったり、

ギャーギャー騒いでる女子が数人いただけだった。つまり、友人はいなかった。そうだよなー、皆部活だよなー、と帰宅部の俺は黄昏れてみたり。

しーない、帰るか！

俺は階段に向かった。

一階に行く間に友人がいたら、いや、たとえ知り合いレベルでも。見つけたら無理矢理にでも一緒に帰ろう。だって、徹がない日に一人で帰るだなんて、まるで徹以外友人がいないみたいじゃないか。結果。会いませんでした。最後のほうなんか、「一度でも話したことがあるヤツ」レベルまで条件を下げたというのに。

ガラス張りの図書館を見ると、カウンターに徹がいて、隣に立つ可愛い女子と楽しそうに話している。

なんだよ、渋々行きますーみたいな風に行ったくせに。俺も図書委員になりやよかった。

……と、図書館の扉が開いた。意外と重い扉を開けたのは、なんと……山瀬サン？

バチツと目が合った。俺達、目が合いやすいのかね？さっさと帰ろうとする山瀬サンを見て、俺は慌てて呼び止めた。

いつもならしないだろう。何でかね？徹を見て、俺だって女子と話してやるさ、と思っってしまったのかもしれない。

「や、山瀬……！」

まさか俺に呼び止められるとは思っていなかったのか、山瀬サンは驚いたようだった。顔だけ後ろを振り返り、自棄になった俺が大きく手を振っているのを見つけると、今度は身体ごと後ろへ向ける。外進生らしい真新しい制服だスカート丈も変えてない。

「……私？」

「ああ」

こちらへ来ない山瀬サンを見るところまお前が来い、ということらしい。もちろんそちらが進行方向でもあるし、俺が山瀬サンのほうに向かった。

「あの、さ。俺の名前知ってる？」

「……寺田……えっと……」

頑張って名前まで名を思い出そうとしてくれる山瀬サンに涙が出そうになる。ゴメンな、俺、苗字も覚えてなかった。

「苗字だけでいいぞ。別に俺のこと明文くん、なんて呼ぶわけじゃないだろ」

「そうだね」

苦笑した山瀬サンの顔を、俺は初めてしっかりと観察できた。

染めたことのないだろう黒髪に、大きくもないが小さくもない目。

まあ、可愛い……かな？といったところだ。どちらかと言われれば可愛い。可愛いよね！と断言され同意を求められたら、そうだな、と言える程度には可愛い。二段階なら可愛いゾーンに入るが、三段階なら普通ゾーン。可もなく不可もなく。

もちろん、他人にそんなことを言えるほど俺だって美形じゃない。

三段階で普通ゾーン。いいじゃないか。

「で、どうしたの？寺田……さんが。私に用？」

ま、確かにどうしたのだよな。俺だって通常時に山瀬サンに声をかけられたら「何？」って思うだろうし。

しかし山瀬サン。今更だが、お前毎日一人で帰ってんのか？寂しいヤツ。

「ああいや、お前一人か？」

「そうだけど」

「ちょ、ちょうどよかった。俺も今一人なんだよな。一緒に帰ろうぜ」

言った、言った、言ったー！別に告白するわけじゃねーだろ、と自分を元気づけ、なんとか俺は最後まで言い切った。

なんかもう、こいつに声かけなきゃよかったとすら思う。一人で帰りたくないなんて、俺って女々しい？もしそうならかなり嫌だな。

「別にいいけど」

俺の葛藤の五分の一ほどの時間しか迷わず、山瀬は頷いたのだった。

席替え（後書き）

けっこう失礼なことを思っている寺田くん。葉子にさん付けで呼ばれ、実は居心地悪く思っていたりいなかったり……どっちでしょうね？分かりませんが。次は葉子視線になります。

少女の心情（前書き）

前回の続きにするつもりが……葉子視点の前回になってしまいました。
た。

でもまあ、近い内に次も投稿するのでいいかなと思いつつ。

少女の心情

私、山瀬葉子が私立有田山高校に入学してから二ヶ月程が経った。

中学はことは別の、私立の女子校に通っていた。弟が有田山に通っているのと、行きたい学部が有田山の付属大学にあるのとで、私は有田山高校を受験した。それに、受けたのは私一人じゃなかったし。友人の、佐々木紗雪もココ受けたしね。え？雪ちゃんが受けなかったら、私も受けなかったか、って？失礼な。受けたよ。

こんなこと自分で言うなって感じなんだけど、私は暗い。いやいや、明るくはない。そして無愛想で可愛げがないらしい。弟の草太に言われました。そう、有田山中学二年の。お前が言うなって感じ。そう言っただけで、先に挙げた二つに「内弁慶」が付けた足されました。内弁慶って……。皆、普通そうじゃないの？なんで家の中でまで大人しくしてなきゃいけないのよ。

と、まあ私の性格はゆっくり理解してもらえばいいか。今のところ目下の問題は、入学してからけっこう経ってるのに、私には雪ちゃん以外の友達がいないこと！雪ちゃんは可愛いし、ちよつと変人だけど、友達ができてました！。羨ましい。

大体、四十人のクラスに四人って！いやまあ、私のクラスだけ五人だったな……。でも、その内三人が男子とか。意味ないでしょ。だって、内進生（先生は内と外で呼び方を変える。別にいいけど、もう二ヶ月も経ったんだからさー、大して変わんないでしょ）の三十五人は三年間の思い出を共に過ごして、私達はぽつと出の新生。去年の修学旅行とかに話題が移ったら、完全な聞き役に徹するしかないんだよ。とは言え、私は基本的にどんな話でも聞き役だけど。人の思い出なんか聞いたって楽しくないっつもの。

「じゃあ、端の人からクジを引け」

担任の里中先生が箱を振り回しながら言った。クジ？どこでも席替えの方法って変わらないんだ。

私の今の席は、一番右端（窓側じゃないほう）の後ろから二番目。私の後ろは渡辺さんだ。山瀬って、「や」じゃない？わ行がいなかったら問答無用で最後になるんだよ。渡辺さん感謝！

引いた数字は十二でした。紙に溢れんばかりの大きさに12と書いてある。

十二ってどこだ……と探し回って三千里、嘘、十メートルくらい。やっとこさ私は目的地に到着しました。

お隣りさんと「どうぞよろしく」と握手を交わすことなく、私達は終礼を終えた、……？

左側から視線を感じた。誰だっけ？覚えてないな。後で出席簿で確認しておこう。

なんとなくスローペースで教科書を鞆にしまいながら、私は隣に神経を集中させた。何？私何かした？と内心焦りながら。

ちらりと横を見ると、そこには富樫さんまでいた。……というか、男子ってさん付けでいいのかな。いつか、別に。

「隣のヤツ、誰だっけ？」

ああなるほど、と視線の意味を納得すると同時に、少なからずガツカリした。こちらだって覚えてないんだから、人のことを言えた義理でもないのに。

男子二人は顔を寄せ合って話している。ただ漏れなんです。むしろ面と向かって聞いてほしい。

「……隣？明文、クラスメイトの名前くらい覚えてあげて」

呆れた富樫さんの声。

「山瀬葉子さんだよ。外進生の」

もう一度ちらりと視線を送ると、なんと！富樫さんじゃない方と目が合ってしまった。気まずい。盗み聞いていたのがばれた？しばらく目を合わせていたが、私は視線を逸らした。早く雪ちゃんのところに行かないと。待ち合わせてるんだから。

富樫さんじゃない方の名前を確認してから（寺田さんというらしい）、私は隣のクラスへ向かった。

雪ちゃんは可愛い！何と言うか……細いし、白いし、睫毛長いし、しつこいようだけど、可愛いのだ。変人だけど。さっき言ったよね？雪ちゃんは、私を見てそうそう申し訳なさそうに謝った。

「ごめん、葉子。あたし今日、図書委員なんだ」

「あ……そうなんだ」

「悪いね。あ、でも。確か昨日葉子が好きな作家の本が入ってたよ。って、あたしが推薦したんだけどさ」

「感謝感激ー。ただその自分の功績を言わなかったらもっとカッコイイのに」

「影で、って？影で働いたって誰も気づいてくれないじゃん。私は自分の苦労は二倍にしてひけらかす！」

二倍……？

とりあえず、私は雪ちゃんと図書館に向かった。雪ちゃんという私が好きなの作家とは、厳密に言えば、私は別にその作家が好きということはない。その作家は恋愛小説が主な著書で、その人が歴史ものとかエッセイとかを書いて私も私は読まないだろう。私が図書館を見て歩いてる間、雪ちゃんはカウンターで本を貸し出していた。すると富樫さんが入ってくる。そうか、彼も図書委員だったわけ。

しばらくして、私は本を借りて図書館を出た。

「……」

寺田さん……よく会いますね。

また居たよ。視力があまりよくないから目が合ったかまでは分からんが。運命かしら。なんてね。

いち早く離れようと一心不乱に足を動かしていると、

「や、山瀬……！」

なにーっ？なんで声かけるの！？今お互いに無視する空気だったじゃん！！

首を捻って顔だけ後ろへ向けた。寺田さんはぶんぶん手を振っている。なに？私達友達！？

仕方なく全身で後ろを向いた。

「……私？」

「ああ」

てくてくとこちらに歩いてきた。ほんとに、何の用だ……。

「あの、さ。俺の名前知ってる？」

知らないよ！！とも言えず。いや、苗字は分かるんだけどさ、名前何だっけ。見たんだけどなあ。

「……寺田……えっと……」

「苗字だけでいいぞ。別に俺のこと明文くん、なんて呼ぶわけじゃないだろ」

当然でしょ。それとなく名前をアピールしてるし。

「そうだね」

付き合いで笑ってから、

「で、どうしたの？寺田……」

はて。ここは呼び捨てるべき？

「……さんが。私に用？」

さん付けにしました。

そう言えば、寺田さんと仲のいい富樫さんも図書委員か。だから一人なのかな？

「ああいや、お前一人か？」

嫌な予感がした。私、今日帰りに本屋に寄りたかったんだけど！

「そうだけど」

「ちょ、ちょうどよかった。俺も今一人なんだよな！。一緒に帰ろうぜ」

やっぱりこうきたー！！

でもまあ、途中どこかで別れるでしょ。

なんたつてここは私立。皆電車登校なのだ。

「別にいいけど」

私は頷いたのだった。

少女の心情（後書き）

葉子、心の中では内弁慶でした。
そして佐々木紗雪ちゃん。「さ」が多いなーと思ったり。

話題提供者の悩み（前書き）

段々葉子がキャラ変わってきたような。

気のせいかな？

気のせいですね！

今回も葉子視点です。登場してんの二人だけなのに、寺田さんの影が薄い……

話題提供者の悩み

山瀬です。

ただいま、寺田さんと下校中。

まあ、分かってただけだね！うん、予想外じゃなかった。多分、てか絶対そうだろうなと思った。だって、無趣味が趣味な私と今日初めて存在を（お互いに）知ったような寺田さん。そんな私達が、和気あいあいと話せるはずがないのだよ。つまり、こんな回りくどい言い方を止めると。

話題がない！

意外かもしれないが、私は沈黙が苦手だ。誰かといて、話題がなくなり沈黙になったりすると是が非でも話題を作り提供せねばという気持ちになってしまふ。だって気まずいじゃん。そしてそれは、家族とか親友相手にでも思う。「心地の好い沈黙」など存在しない！とは私の持論である。

大体さー、誘ったの寺田さんじゃん。そっちから話題を提供するのがスジつてものでしょ。なんで私がこんな必死に話題探してんの？仕方なく、私は最もポピュラーな下校話題に手を出すことにした。

「寺田さんさ、どこ住んでんの？」

「え、お、俺！？」

そんなに驚く話題でもなくない？そうだよお前だよと言いたいのを我慢して、私は大きく頷いた。けれど彼はなかなか答えようとしな

いに、私のこと警戒してんの？誰も寺田さんにストーカー行為とかしないから。大体若い女性ならともかく、男が最寄り駅聞かれてビクビクすんなつつの。それとも何、秘密主義？私が心のホームで内弁慶さをさらしていると、なんと、寺田さんは質問を質問で返してきた。

「お前こそ、どこ住んでんだよ」

相手がどう返そうと、話題を五倍に膨らます準備はできていた。それなのに、変化球をくらった気分である。

「私？」

……。

いざ自分が聞かれて、私は初めて答えづらい気持ち理解了きた。別にストーカーとか秘密主義とか関係なく、私は寺田さんに答えるのに躊躇してしまった。

でもね？ぜひ言い訳をさせてほしい。

私はこれまで女子校だったのだよ。

漫画ほどドロドロしてないけど、女の樂園といえるほどには樂園でもなかった女子校に。お恥ずかしい話ですが。

私は男子と二人で下校するのが初めてです。

「……私の最寄り駅は所ノ里駅^{しそり}だけど」

結局、私は答えた。

「え！？嘘だろ、所ノ里！？」

嘘じゃないです。てか、ほんとよく驚くよね寺田さん。

「寺田さんは？」

私に答えさせておいて、自分は黙秘を決め込んだりしないでしょうね。そんな心の声が聞こえたのか、寺田さんは小さな小さな声でボソッと呟いた。

「……小狐公園駅……」

「……」

噴いた。小狐公園駅！！私の駅の一個後の駅です。けど、それは噴く理由じゃない。

小狐公園は、その愛らしい名前から、「メルヘンパーク」と呼ばれているのです。可愛い！可愛いけど寺田さんには似合わない！！今週最高のツボだった。

「あははははは！！」

全力で大爆笑し始めた私に、寺田さんはびくりと肩を揺らした。なるほど、彼はストーカー行為を恐れていたのではなく、もちろん

秘密主義なわけでもなく。

「め、メルヘンパーク……！！」

駅の名前を言いたくなかったのだね。

納得です。

寺田さんは私の笑いようにを恨めしげに見ていたが、駅に着いたことで肩を落とした。私も一人でニヤニヤするわけにもいかず、頑張つて笑いを堪えた。

ICのカードで改札を抜ける。蜘蛛の巣みたいにいろんな線路がこね駅から出ていて、初めてきた時は迷った。さすがにもう迷わないけど。私と寺田さんはまっすぐ同じ方向に歩いていく。

うーん、本屋行きたいなあ。でも下手なこと言つて、「一緒に行くよ」的展開なるのは避けたい。だって、寺田さんだって乙女チックな、表紙の半分がピンクな本の売り場に行きたくないでしょ？私は来てほしくない。

電車に乗り込み、ガタガタと揺られている間中、再び私達を沈黙が包み込む。でも、今回は好都合だった。盛り上がっている時に「私本屋寄るから」とか言ったら空気読めない女の典型みたいになるけど、気まずい空気の中だったら、別に途中抜けたって構わないですよ。

少しして、私がいつも鼻屑にしている大きな本屋がある駅に止まった。私はサッと鞆を肩にかけ直して、寺田さんに手を振った。

「私、この駅に用あるから降りるね。じゃあまた明日」

「え？」

寺田さんが目を丸くしている内に、私は途中下車をした。

いきなり同乗者に降りられた寺田さんの気持ちなど考えぬまま、私はウキウキルンルンと本屋の少女小説コーナーに向かったのだった。

話題提供者の悩み（後書き）

次は……一応寺田さん視点の予定です。
一応。

特別の翌日（1）（前書き）

今回、葉子は出てきません。

ちよつと寺田さん暗め。かな？

新キャラ柚子川ちゃんと寺田さんの会話がメイン。

特別の翌日（１）

朝起きて。

昨日のことは夢だったのだろうか、と俺は思った。

山瀬サンと帰ったことだ。あいつは所ノ里駅に住んでいて、小狐公園駅に住んでいる俺はメルヘンパークだと馬鹿にされた。

いや、夢じゃない。馬鹿にしゃがって。気にしてるのに！だから嫌なんだよ、人に最寄り駅言うの。

思ったより失礼なヤツだなと思いつつ、あの冷たい顔が意外と簡単に笑うのに驚いた。何を話せばいいのか分からなくて、気まずさを感じていたのは俺だけだったのだろうか。

山瀬サンはさらりと話を盛り上げて、そして最後に途中放棄した。

例えば、あれが徹だったのなら、俺は何も言わないだろう。明日も明後日も共に帰るのだから。ただ、気まずい空気の中で話題を探していた俺は、山瀬サンが途中で電車を降りたことに予想以上のショックを受けていたらしい。朝の気分がいつもに比べて悪く、学校に行くのが億劫に感じていた。

普通、夜は皆ネガティブになると言うが……俺は朝に暗くなる。悪い方向に考え、そして一人落ち込むのだ。

……もしかして俺、山瀬サンに嫌われてる？

嫌いという感情を持たれるほどに関わっていない。けれど朝の俺は、きつとそうなのだとその疑問を断定にってしまう。

電車の中では、無意識に山瀬サンを探してしまった。キョロキョロと挙動不審な動きをして、見つからなくて肩を落とす。初恋少年か、って感じた。べつに山瀬サンに嫌われていたところで、俺の人生は変わらないだろうに。

学校の最寄り駅の前にある大きな信号は、生徒の待ち合わせ場所に利用されている。今日も何人も生徒（主に女子。山瀬サンはいなかった）が携帯をいじりながら相手を待っている。

学校まで十数分なんだから、一々待ち合わせしてんじゃねーよ。

「よっ！寺田！」

「わわっ」

悪態を吐いていた真っ最中に背中をどつかれ、悲鳴をあげてしまった。相手も、する気のなかった奇襲が成功してしまいキョトン、→している。

「柚子川^{ゆずがわ}、お前な……」

山瀬サンを普通の位置に置くと、こいつは美人だ。って、何で俺山瀬サンを基準にしているんだろう……？

「あははは、あんた、驚きすぎ！それより、誰かと待ち合わせてんの？」

長い髪を女優のように書き上げて、柚子川は言った。待ち合わせ？「なんで？」

「だって、人を探してたみたいだったから。違うならいいの。信号も青くなつたし、行こ」

探してたみたい……今の俺が探すとしたら……頭の中に浮かんだ顔を消すために、俺は彼女よりも数倍可愛い柚子川^{あかり}の隣を歩いた。

柚子川明は俺と同じ、小狐公園駅在住の幼なじみだ。男受けのする美人で、どちらかと言うと女子には嫌われているらしい。いや、嫌われているというよりも、敬遠されているのかも。顔が良いし、運動できるからな。頭は悪いけど。密かに徹とお似合いだと思っているのだが、あまり恋愛話をこいつとしたくないのでそのことを言ったことはない。

「……で？」

「で？って？」

「昨日。山瀬さんと帰ってたでしょ」

「なっ……！」

なんで知ってるんだ！？

「昨日、あんたが頑張って誘ってるとこ見ちゃった」

見ちゃった、じゃない！その時に声かけろよっ。そしたらこんな微

妙な気分にならなかったのに。

「女つ気がなかった寺田がねえ。ふうーん。へえーえ」
「なんだよ」

にまにま笑いやがって。笑うと女は二倍美しくなるらしいが、にまにました美人はイマイチだった。

「でも、山瀬さんだなんて。マイナーなところ行くねえ」
失礼だぞ、山瀬サンに。

自分のことは棚に上げて思ってしまった。あれだよな。自分がしても気にならないけど人がしたらすごく気になるってヤツ。

「マイナー？」

敬遠されているがゆえに顔の広い柚子川。なにか山瀬サンについて知ってるだろうか？

「うん。私ができることじゃないけど、あの子、友達少ないよねえ」
本当にお前が言えることじゃねーよな。

「少ない？いるのか」

「あんたも大概、失礼だよな。そりゃ二ヶ月も通ってりゃ一人はできんでしょ」

誰があいつの友達なんだ？とは聞けなかった。そこまで聞いたら、自分が山瀬サンを気にしているのが柚子川に伝わりそうで（もうばれてるかもしれないが）。

「あとね、頭は良いみたいよ」

柚子川は聞いてもいないのにベラベラと知ってる内容を話す。有り難いけど、こいつにだけは秘密を話すまい、と誓わせるヤツだ。こいつに言うことは、メガホンで全国民にばらされても恥ずかしくないことだけにしよう。

「まあ、外進だからな」

外進が頑張って受験勉強をしている間、俺達は遊び暮らしていた。中・高がエスカレーター式の学校に通う生徒達にとって、その境目は中たるみの時期なんだとか。そんな時、山瀬サンや、他の外進は勉強をしていた。

あいつらが勉強できるのは、俺や柚子川が軽々しく「羨ましいよね」なんて言えることではないのだ。

「うん。この間、数学教えてもらっちゃった」

山瀬サンが柚子川に勉強を教える。その場面が想像できない。

「え、仲良いのか？お前ら」

「いや？偶然、話の流れで」

どんな流れだよ。女の話は有り得ない方向に飛ぶというから、聞いても分からないだろうけど。

「コサインって何だっけ？って言ったら、睨まれた」

「……三角比だろ」

……睨んだんじゃなくて、呆れたんじゃないか？

「それに、変わってるよね」

脳天気な柚子川が、少し眉をひそめた。

「その時に、アド交換しよー、って言ったら真顔で、」

スツと柚子川は真顔になる。そういやこいつは演劇部だったか。

「なんで？……って言われた」

腹から声を出したのか、周りに響く大声で「なんで？」の部分を発声する。

皆こっち見てるだろーが！

山瀬サンの情報をずいぶんと集めて、俺と柚子川は学校に着いた。

教室に着いてから、登校途中の柚子川について聞かれまくったのは、この後の話だった。

特別の翌日（1）（後書き）

次こそは葉子を！

でも視線は寺田さん。

寺田さん視線のほうで、大人しくて書きやすいという現実……
雪ちゃん出したいなあ。

特別の翌日（2）（前書き）

今回は葉子が出せました。

少しだけ、恋愛色が濃い、かな？当社比で。

特別の翌日（２）

柚子川と教室に入ると、散々冷やかされた。もちろん、皆俺と柚子川の関係（メルヘンパーク仲間だ）を知っているヤツらなので、こちらも冗談で返すことができる。山瀬サンはまだ来ていなかった。残念に思いつつもホッとして、俺は端の席に移動した。鞆をかけてぼーっとしていると、徹が来た。

「おはよ、明文。聞いたよ」

「おう。……何を？」

「昨日、山瀬さんと帰ったんだって？」

「おま、それ誰から……！？」

徹は俺の質問を軽く無視して、徹はににこと博愛主義者っぽい笑みを浮かべる。

人類皆友達さ、と書いてあるポスターの中心にでもこいつの写真を貼ったらけっこう良いんじゃないか？

徹は窓に寄ると、俺を引っ張った。

「あ、ほら山瀬さんだよ」

窓を開けて、徹が指を指す。無駄に長い指の先に、なるほど山瀬サンらしき人が。隣には山瀬サンより少し背の高い男子生徒。二人は楽しそうに会話をしていた。

「……山瀬サンだな」

なんだか心が急速に冷えていくのを感じながら、二人を見る。昨日の山瀬サンは、あれほどの笑みを俺に見せたのだろうか？

いや、自問するまでもない。見せなかった。

悔しいと思うよりも、感じたのは脱力感だった。

「山瀬さん！」

友達の友達は皆友達、をモットーとしている徹は、何の躊躇もなく手を振った。校門を通る生徒が一人残らずこちらを見る。

恥ずかしい。非常に。柚子川といい、どうして美形は目立つことを

いきなりするのか。

キラキラした目で俺を見るのは、俺もやれ、と言いたいのだろうか。正直なところ、すごく嫌だった。

しかし山瀬さんとその隣の男子（ネクタイを見ると、中等部だった）がこちらを見たので、俺も仕方なく手を振った。

山瀬サンは少し驚いて、控えめに返してきた。確かに、ここで大きく返したりでもしたら、かなり目立つよな。

「……………」

あ、なんか……嬉しい。ただ手を振り返されただけなのに。

すると山瀬サンの隣の男子がこちらを指差して何かを言う。山瀬サンは怒ったように男子に言い返して、手を振るのを止めてしまった。物足りなく思った。徹もそうだろうと思ひ横を見ると、しかしヤツはそうでもないらしかった。

「ははは、返してくれたね」

楽しそうに笑っている。

「隣の中学生、誰だろうな」

「彼氏じゃない？」

俺もそう思った……。

彼氏か……。友達よりも先に彼氏ができる。順序逆じゃないか？余計なお世話だと言われればそれまでだが。

窓の外を見ると、すでに山瀬サンは校舎に入っただけらしい。見えなかった。

「富樫くん」

未練がましく窓を見つめていると（何への未練かって？何だろうな。俺も分からん）、軽やかな声がした。聞いたことのない声音で、呼ばれた徹よりも先に振り向く。見覚えのない女子だった。初めて山瀬サンを見た時と同種の見覚えのなさだ。外進かな。

「ああ、佐々木さん」

そして女子は可愛かった。柚子川が「美しい」だと思ったら女子……佐々木さんは「可愛い」だ。

徹と並んでもよく似合うこと。

「どうしたの？」

「今日、お昼休みに図書館に集まるように、と司書に言われたの。五十分かららしいから、絶対に来てよ」

やたら横柄に言つと、ニコリともせず、もう用は終わりだと言わんばかりにクルリと踵を返す。

「あ、ありがとう。佐々木さん」

「伝えるように言われたただだから」

佐々木さんが教室から出るのを待って、彼女が教室の扉を閉めてから俺は、

「可愛いのに変なヤツだな」

と正直な感想を漏らしたのだった。徹はそうだね、ともそんなことないよ、とも言わずに頭をかいた。朝のHRギリギリに山瀬サンは教室に入ってきた（後で聞くとそこによると、友人に会つたらしい。事実かは知らないが）。

気まずさを思い出して目を逸らした俺とひ違い、徹は無駄に爽やかに山瀬サンに声をかけた。

「おはよう、山瀬さん」

「……おはよ。富樫……さん？」

「はは、どうせなら、くんにしてよ。さんじゃなくてさ。隣のクラスに同姓の女子がいるんだ。紛らわしいでしょ？」

「あ、ああそうなの。じゃあ、富樫くん」

スマートにさん呼びを避けた徹に、俺は羨望の眼差しを向けた。

その後、里中が教室に入ってきて、俺は山瀬サンと挨拶を交わしていなかったことに気づき——後悔に似た感情を胸に抱いた。

特別の翌日（2）（後書き）

次は……一応葉子視点の予定。
まだ「特別の翌日」ですね。一日が長いなんのって。

特別の翌日（3）（前書き）

申し訳ございません！

寺田さん視点になつてしまいました！！

それと、莓ミルクのジュースがお好きな方はこの話を読まれない方がよろしいかと思われます……

寛大なお心で寺田さんの莓ミルク批判を読んでやって下さい。

特別の翌日(3)

一般的に、外進生は内進生よりも賢いとされている。当然、それは絶対ではない。けれども、大体においてそれは正しかった。ちなみに俺は、あまり賢くない。内進生よりも下（だと言われている。俺の意見じゃねーよ）の外進生の中でも下のほうだ。二回試験を受けたら、一回は補習にかかったり赤点をとっちまう。俺としては、何の試験勉強もしてないのにそんだけの成績を修めているんだと誇りたい。だって、俺より試験勉強して俺以下の成績のヤツもいるんだぜ？それって、すごくないか？俺が！

徹にそれを言ったら失笑された。どうせ、低レベルな戦いだな、とでも思っただら。あいつは試験二週間前くらいから試験勉強してるし、何より、授業中寝ないから。

俺？俺は寝るよ、寝る寝る。だって眠くなんだから。数学は科目の教師が怖いから寝ないけど。里中が教える古文なんて、皆昼寝の時間とばかりに寝てる。

もちろん、俺も。

でも……、きつと外進生は寝ないんだろうな。

日頃から思うよ。授業中寝なかったら、絶対成績上がるな、って。思うだけで寝るけど。

さて。

一時間目は古文でした。誰かさんのせいで昨夜は眠れなかった（誰か、って？言わん！）し、いつもの癖でもあったし。里中の声は子守唄みたい……って、キモっ！

始まって五分もすれば、睡魔が近寄ってくる。戦う意思のない俺は睡魔の手をとり、ガクリと机に突っ伏した。里中の授業は、無音で有名だ。いや、悪い意味で。

夢の世界へ旅立っていた俺は、隣の席の山瀬サンが俺よりも早く机に倒れ込んでいることに気付かなかった。

……はい、睡眠をとり昨夜の寝不足分を取りかえして二時間目。数学？です。めちゃくちゃ怖い先生。俺、中学生の時に、あの先生の授業で寝たんだよ。そしたら、終わるまで立って授業を受けさせられて、その上職員室に呼び出されて。次寝たら親を呼び出すとまで言われたんだぜ！？

だから、心なしに数学？だけは内進生のほうが授業にやる気を見せてるんだよな。どこか鬼々迫る表情を浮かべて授業を受けている。基本的に睡魔に抵抗しない俺だって、この時ばかりは精一杯戦う。負けそうになったら自分の肌をチクチクと鉛筆で刺してんだぞ。だから……あっさり倒れてる山瀬サンを見て驚いた。

こいつ寝るタイプ！？

その前に、このピリピリした空気を読めよ！熟睡してるのか、山瀬サンはピクリともしない。

やべ、先生こっち来んぞ！？

本人よりも焦って、俺はかの有名なMO・O消しゴムを山瀬サンに向かって投げつけた。

ガツと小さく揺れて、山瀬サンは起きた。俺の投げた消しゴムは山瀬サンの頭にヒットして、跳ね返って教室の隅に転がっていく。頭を押さえながらキョロキョロしていた山瀬サンは、こちらに歩いてくる教師に気付き、黒板を写しにかかった。

グルリと教室を一周し、教師は黒板にチョークで字を書きはじめる。良かったな、という思いで山瀬サンを見ると、ヤツもこちらを見ていた。

「ありがとう」

厚くもなく薄くもない唇がそう動いた気がした。

三時間目は、化学！好きかって？嫌いです。むしろ、化学好きなヤツいんの？って感じ。まあいるんだろうけど。世界の人々が皆俺と同じ性格だったら、きっと日本はまだ発展途上国だったと思う。いや、絶対に。

始まって十分。●ONO消しゴムを回収し忘れていたことに気がつ

いた。今取りに行ったら、間違いなくばれるよな。

唸っていると、コン、と俺の頭頂部に衝撃が。すぐ後に床にMO・O消しゴムが。

……えっ？何で？

隣を見ると、山瀬サンが声を立てずに俺を指差して笑っていた。先程の間抜けな顔がお気に召したらしい。

——拾ってくれてたんだな。

化学が終わった頃には、山瀬サンは俺の中ですっかり「よく寝る子」になっていた。いつ寝るのかハラハラして、俺はその日から「寝ない人」に昇格した。

四時間目だって、山瀬サンが寝ないよう気にかけていればいつのまにか終わっていたりする。

これで成績が上げれば、山瀬サンのお陰だな。なんて思った午前中でした。

四時間目が終わると、昼休みに入る。いつもなら徹と学校の日替わり弁当片手に屋上に向かうところだが、愛想のない佐々木さんの伝言があったことで、徹は図書館に向かう。どうせ一階まで行くんだろ、と一緒に階段に向かう。

「あれ？ねえ明文、あれ山瀬さんじゃない？」

「え？」

螺旋状（って言うほど格好よくないが）の階段の先に、確かに山瀬サンらしき人影が。らしき、と言うのは、山瀬サンが一人じゃなかったからだ。あの……佐々木さんが隣にいる。

「あいつら仲いいのか……」

「うん。みたいだよ」

思わず漏れた呟きに、徹はさも最初から知っていましたよー、とでも言うように頷く。

「なんで言わねーんだよ！」

「え？何で言うの？」

そりゃあ……何でだろうな？

黙り込む俺に徹は何か言おうとしたようだったが、図書館に着いたことで口をつぐんだ。

「じゃあ……明文」

「おー、頑張れよ」

別れてから、俺は購買に向かった。安い旨いが自慢の弁当屋に朝買つておいた食券を出し、日替わり弁当を受け取る。

「げ……スパゲティーサラダがある」

「寺田さん、スパゲティーサラダ嫌いなのか？」

「ああ、なんで麺をサラダに入れるのか……って、や、山瀬!？」

ナチュラルに会話していたのは山瀬サンでした。手には弁当（家で作ったヤツね。買ったヤツじゃない）と苺ミルク。昔、友人に化学合成料の味がすると言われてから飲めなくなつたものだ。

「あ、私これ買ったの」

「苺ミルク？」

「そう」

流れで共に階段を上がる。

誰と食おっかなー、と思っていると、山瀬サンは二階で足を止めた。二階——中学生の教室がある階だ。

「じゃあ私、ここで——」

こいつが途中下車した時と、何かが重なった。あの年下の彼氏のもとに行くのだろうか？

朝の憂鬱な気分が、再び心の中に広がった。どうして？分からない。ただ、これまで縁のない感情だった。だからこそ、俺はこの気分をただ「不愉快な感情」としか思わなかった。

「……山瀬」

「え？」

「もし一人なら、一緒に屋上で食べないか？」

今日は、徹が佐々木さんと笑い合っているところを見てない。だから、あいつに張り合おうとする気持ちは少しもなかった。

それにこれは……誰でもいいから、という気持ちでもない。

断られたら引きこもってやる。そんな固い決心の俺とはうらはらに。
「屋上！？いいの！？」

山瀬サンはあっさりと、俺の感情を操作する。

俺よりも山瀬サンのほうが体重は軽いはずなのに。屋上へ向かう足どりは、絶対に俺のほうが軽かった。

屋上は、カップルが多い！！

徹と食べてるときはバカップルめ、と悪態を吐いていた俺だったが、今日は意味もなく周りが気になった。

山瀬サンが屋上を囲む柵兼手摺り近くに陣取って、俺に手招きした。

「私さー、一回ここで食べたかったんだよねー」

「食べればいいんじゃないの？」

「雪ちゃんが、高所恐怖症なんだよ」

「雪ちゃん？」

あの男子か？

「佐々木紗雪ちゃん！図書委員の、すっごい可愛い子。知らないかな？外進だからね……知らないかも」

佐々木紗雪……佐々木って、あいつだよな。彼氏と食ってんじゃないのか。

「不愉快な感情」は、すっかりナリをひそめていた。

「いや、知ってるぞ。今日徹に司書の伝言伝えてた」

「ししょ？」

「図書館の」

「ああ、司書ね」

弁当を、組んだ足を中心において食べていると、山瀬サンは目をランランと輝かせてそれを見つめてきた。

「……山瀬？」

「私これ、一度でいいから食べたかったんだよね……。草太は毎日これ食べてんのかぁ、ずるいね」

「……、草太？」

卵焼きの味など分らなかった。食べてから塩か砂糖か、どちらが入っていたでしょう？と聞かれても俺は答えられなかっただろう。

「うん……弟」

「弟か……弟？」

「弟」

「弟！」

だからなに、と俺を見上げた山瀬サンは、ポカンと口を開く。「？」とその顔は語っていた。

「……寺田さん？どうしたの……？」

「なにが？」

「いや……分からないならいいんだけど……、いや本当にどうしたの？良いことあった？」

こいつは変なことを言う。

良いことなんて、何もないのに！

「あ、山瀬、スパゲティーサラダ好きなんだっけ？」

「え？いや、特別好きということはないけど……」

「これやるよ」

「いいの？」

俺は寛大な気持ちでスパゲティーサラダを山瀬サンに贈与した。

「じゃあ私もこれあげるよ」

唐揚げをもらい、山瀬サンが若干引きぎみなのにも気付かず、俺は理由なくテンションが高かった。なんでだろうな？理由は分からないが。

特別の翌日（3）（後書き）

寺田さんは一人で盛り上がっているようですが……葉子のほうはどうなんだろう？

ちなみに苺ミルクの化学合成料は、私が実際に友人に言われ飲む気無くした、という実話が元となっております。

一応、「特別の翌日」は今回で終わりかな？

可愛さと告白（1）（前書き）

なんか番外編っぽいですが続きます。

告白はしたこともされたこともない……葉子が他人だとは思えないのは私だけでしょうか。

可愛さと告白(1)

実は、共学に行ったら告白したりされたりするのは当然なのかな、とか思ったりしてた。誰にも言えない実はな実話(今私、上手いこと言わなかった?) だけどね。二ヶ月過ぎて気付いた。気付かされた! 世間の厳しい現実に!!

どこでも何でも、好かれるのは美形なんだ…… って! いいさいいさ。デブ専がいるんだから、あえて普通の顔を狙う方だっっていらいっやるかもしれないじゃないか!

雪ちゃんはね? もう告白されたんだって。何度も!

別に? 悔しくなんてないよ。雪ちゃん可愛いし、可愛いし、可愛いし。大体、ある程度の段階と交流を挟んでから告白するのが普通でしょ。

「一目惚れしました」 って。なんてフーリングな理由。私だって一目惚れされてみたいよ!

…… と、まあ長い長い前置きをしました。

今? 今は寺田さんと一緒にいるよ。いや、まったくの偶然なんだけどさ、雪ちゃんの告白現場を見てしまつて。雪ちゃんの告白現場っていうか、雪ちゃんが告白してるんじゃないくて、雪ちゃんはされてる方なんだけどね。

羨ましいなあ。なんて思ったりして。

掃除のゴミ出しをしてたら、寺田さんが壁に張り付いているのを見かけたの。最近私達、けっこう話すようになったんだ。授業中とか何度も起こしてもらってる。授業中眠くならない人なのかな?

私なんかすぐ寝ちゃうから、寝ない人は尊敬するよ。って寺田さんに言ったら、苦笑いをされた。なんでだろう?

…… って言うのはいいとして、そう、問題なのは今の状況だよ。

「一目惚れしました! 付き合ってください!」

と体育会系的な勢いで頭を下げた角刈りの彼。いい人っぽいけど、

正直雪ちゃんと並んでお似合いかと問われれば、「ノー」と答えるだろう。あんまり似合わない。天使と農民（べつに農民を馬鹿にしたいわけではないよ！？）な感じ。

雪ちゃんはふう、と大人な息を吐くと、腰に手を当てた。

「悪いけど――」

「「佐々木さん！！」」

「！？」

いきなり、合唱のように複数の声が重なって聞こえた。私達がいるのとは反対側から。私達も驚いたが、雪ちゃんはもつと驚いただろう。跳び上がっていた。跳び上がっても可愛いつて、一種の才能だよな。

「な、なんだ……？」

「あ、なんか出てきた」

ゾロゾロと出てきたのは、皆頭を角刈りにしたいかにもな「野球球児」だった。

本当に同年代かと思うほどに老けて……大人びた人が多い。彼らに比べたら雪ちゃんに告白したのは小柄なほうだ。

ふと目を逸らし寺田さんを見ると、いつもより格好よく見えた気がした。

「自分、サードの吉田です！！栗田の先輩です！！」

五、六人の集団の中でも特に威つい人が前にでる。出たぶんだけ、雪ちゃんも後ずさった。

……ん？

「あの人、高二じゃない？なんで雪ちゃんに敬語使ってるの？」

「女に免疫ないんだろ。野球部だからな。気の毒に」

……寺田さんは免疫あるのかな。私には関係ないことだけど……。

「マネージャーとかいないの？可愛い、それこそ雪ちゃんみたいに可愛い女の子で、レモンの蜂蜜漬けを……もが」

「うるさい。見つかるだろーが」

蜂蜜漬けを差し入れるの！と続ける前に、口を塞がれた。

寺田さんって、絶対私のこと異性だと思ってないよね。思ってたなら、こんな過剰な接触しないでしょ。

一人で赤くなるのは不本意なので、私も雪ちゃんのほうに神経を集中させた。

「どうか、栗田と付き合ってやって下さい、お願いします!!」

「「お願いしやーす!!」」「いつそ素晴らしいと呼べるようなハモリを見せて、野球部一同（ではないか。私野球のルールって少しも分かんないけど、部員がこんな少ないわけないもんね）は頭を下げた。

「……」

「「……」」

その沈黙は永遠に続くかと思われた時――。

「よ、寺田……と、山瀬さん？それ何プレイ？」

なかなか戻らない私を心配してくれたのか、柚子川さんが現れた。

「ふれ……？や、山瀬!？」

口を塞がれたまま、強く頷くと寺田さんはすぐに手を離れた。

「早く言えよ!」

「口塞がれて、言えなかったでしょ」

「だ、だとしても……っあーもう柚子川!!」

「何」

「せっかく面白くなってきたところだったのに……!」

再び壁から覗き込むと、雪ちゃんとバッチリ目が合った。その目の奥に、安堵の色が見えたのは、きっと私の気のせいじゃない。

「悪いけど、考えさせて」

とだけ栗田くんに言って、小走りで私に向かって来た。

「ゆ、雪ちゃん!偶然だね!!」

「……なわけないでしょ。見てたとしても、怒らないから」

疲れたように、雪ちゃんは笑った。

そして寺田さんや柚子川さんを今初めて気付いたかのように見て、
「……で、誰？」

あれ？雪ちゃんと寺田さんって初対面だったわけ？

とりあえず野球部に会わないように、このことで、私達はゴミ出しをしてから教室に向かった。どうせだから共に帰りましようという流れになり（富樫くんは部活だって）、帰りながら寺田さんと雪ちゃんは自己紹介を交わした。

「君が、一昨日葉子と一緒に昼を食べたって言ってた寺田さんか」女子かと思ってたよ、と余計なことまで付け足してくれる。確かに、昨日雪ちゃんとのランチタイムで聞かれたのだよ。

「へえ、その寺田さんって女？」

「え！？う……うーん……」

どちらとも取れる返事に、雪ちゃんは女だと思っていたらしい。そりやそうか。寺田くん、ならまだしも寺田さん、なんだから。

でもなんか、言いづらかった。寺田さんとお昼を一緒に食べたのは事実だし、べつに人には言えないことをしたわけではないけど。…でも。

「そ、それより、雪ちゃん、栗田くんの告白になんて応えるの？」

割り込むようにして私が口を開くと、雪ちゃんは寺田さん話で盛り上がる気持ちはなかったのか、すぐに私の話に乗ってくれた。

「断るよ」

当たり前でしょ？とその美しい顔は言う。

告白されるのも、意外と楽じゃないのかも、なんて私は思った。だって告白って、するのもされるのも疲れそうじゃない？どちらも経験したことないけどさ。

駅に着くと、私は雪ちゃんと別れた（雪ちゃんも所ノ里駅の人だけど、週に二回、遠くの塾に通っているんだよ）。

「帰ろっか」

寺田さんに声をかけると、目を合わさずにこの人は答える。

「あ、ああ……」

……？

なんか最近、寺田さんが変な感じ。なんでだろ。何を聞いても、歯

切れが悪いような。

「……でも、雪ちゃんも場慣れしてるよね。もし私が告白されたら、舞い上がって付き合っちゃうかも」

「相手を好きじゃなくても？」

いつも通りに出した話題。なのに、答える寺田さんの声には非難の色が含まれている気がした。

……例え話だよ？

「寺田さんは違うの？……告白されたことある？」

「ん……まあ、一度くらいは」

あるんだ。ふーん。へーえ。

何とも言えない卑屈な気持ちになって、私は黙り込んだ。

「おい、山瀬？」

「……」

「断ったぞ？だってよく知らない女子だったし」寺田さんが言い訳口調なのと、ここが電車内であることを思い出して、私は思わず笑ってしまう。

「なんで。言い訳してるみたいだよ」

「言い訳？」

「そう。寺田さんは、浮気とかしなさそうなタイプだね」

浮気しない人って、私好きだなあ。ってか、嫌いな人いないんじゃない？

うん、少女小説のヒーローの第一条件でしょ。

「浮気ねえ。多少の浮気は男の甲斐性って言うけどな」

「私、もし彼氏が浮気したら絶対別れる。」

「——じゃあ……」

寺田さんが何事か言いかけた時、電車は所ノ里駅に到着した。

「じゃ。メルヘンパークよろしく」

「うっさい」

歩きなれた駅のホームを歩きながら思う。

——じゃあ……何？

寺田さん、君は何と言おうとしたの？

可愛さと告白（1）（後書き）

続きます。

「お嬢様と侍女の憂鬱」もよろしくお願いします！！（完全に宣伝です…）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4693p/>

お隣りさん

2010年12月21日21時33分発行